

北海道大好き！～アイヌ語ゆかりの北海道の地名（第14回）

当社は、7月12日に白老町にオープンしたアイヌ文化復興等に関するナショナルセンター「民族共生象徴空間(愛称:ウポポイ)」の「官民応援ネットワーク」に参画しています。

先住民族が使っていたアイヌ語を起源とした地名が多く残る我らのふるさと北海道。北海道で使う電気を生み出している発電所所在地の地名などについて、その由来をご紹介します。

最終回の第14回目は、当社最大の発電所である苫東厚真発電所です。

厚真(アツマ)

苫小牧市の東に位置する厚真町。太平洋沿岸には苫小牧東港を擁し、日高自動車道や新千歳空港などアクセスが良い特長があることから、町の南側には広大な苫東工業地域が広がり、自動車産業や製造業など多くの企業が進出しています。

また厚真町の食といえば米作など農業が盛んで、一方あづまジンギスカンも有名です。

その厚真町に当社最大の火力発電所である苫東厚真発電所(1、2、4号機:合計出力165万kW)があります。

使用燃料は石炭で、オーストラリアやカナダなどから輸入していますが、その使用量は何と年間400万トンにもなります。ちなみに東京スカイツリー(鉄骨など)の総重量が36,000トンですので、東京スカイツリー111体分の重さの石炭が毎年使用されている計算になります。

環境保全にも力を入れており、石炭の燃焼で発生する窒素酸化物、硫酸酸化物を除去するため、脱硝装置や脱硫装置を設置し、大気汚染の防止に努めています。また、苫東厚真発電所で発生した石炭灰を資源として、セメント原料や土木材料などに有効活用しています。

さて、「厚真」の由来は諸説あり、現在では特定することが難しいとされています。

ひとつの説は、アツ・マ(at-ma ムササビ(モモンガ)・泳ぐ)で、エゾモモンガが厚真川を泳ぐ姿をアイヌの人が見たことに由来するものです。また、アトマブ(at-oma-p nire ;おひょう・ある・ところ)で、「おひょう」(ニレ科の落葉樹で、伝統的な樹皮衣などの素材になりました)がたくさん生い茂っていたことから名づけられたとする説もあります。

いずれにしても、アイヌの人々の暮らしや体験がもとになった地名であることが伺えると思います。このように、アイヌ語に由来する地名は、アイヌの人々が北海道の各地で暮らしを営んできたことを物語る証(あかし)の一つでもあるのです。



苫東厚真発電所

(出典: 山田秀三「北海道の地名」)